

書 評

『英語世界のナビゲーション』

森あおい, Stuart Ruttan, 田中秀毅,  
五十嵐博久, 金田仁秀 著  
(青踏社 2003年3月)

広島女学院大学文学部英米言語文化学科の teaching staffers が、それぞれの専攻分野での研究を、学科の研究会で披露し、お互いが批評しあって作り上げたのが、本書である。英文学、米文学、英語学、英語教育学と研究分野は多岐にわたっているので、ひとりの評者の手に負えるものではないが、それを承知の上で敢えて、紹介を主に批評を試みることにする。

まず、五十嵐博久氏の「『マクベス』本文の成立をめぐって」を取り上げる。シェイクスピアの手書き原稿はひとつも現代に残っていない。1616年シェイクスピアの死後7年ほど経って二人の友人が発行した First Folio (1623年) が最も権威あるテキストである。このテキストは、日本でも、明星大学と甲南女子大学が所蔵している。甲南女子大学が数十年前に8000万円で購入したそうだから、今では、一億円以上はするテキストである。さて、「マクベス」という悲劇の作品は、いわゆる4つ折り版のテキストがなく、First Folio のテキストのなかでも最も問題の多いものと言われている。五十嵐氏は、テキストを精読し、F1のテキストは、「原(Ur)マクベス」を改変、削除した物であろうと推定して、「原マクベス」の復元を試みる。このあたりは、まるで推理小説を読むようで楽しい。第2次世界大戦後は、source 研究とか時代背景研究よりは、直接テキストの精密解釈に重点を置く「新批評」が流行してきたが、この流れに逆らって、あえて英国における英文学研究の伝統をつぐ本文批評に取り組む五十嵐氏の研究情熱に敬意を払うものである。

つぎに、金田仁秀氏が執筆した「セクシュアル・パフォーマンス——サロメ／『サロメ』——」に移ろう。19世紀末の唯美主義運動、デカダンス文学の代表者であるオスカ・ワイルドの作品を金田氏は、構造主義言語学、特にプラハ学派、またフランスの Tzvetan Todorov, Claude Bremond, G. Genette, groupe  $\mu$  (グループミュー) などの構造主義詩学の手法を存分に利用して、ワイルドの『サロメ』を分析する。新約聖書のマルコ伝にある Herod Philip と Herodias の娘であるサロメが、ヘロド王の前で踊りを踊り、褒美に何が欲しいかと尋ねられて、母親の言うままに、洗礼者ヨハネの首を所望したとされ、この時の模様が、色々な芸術家、作家によって取り上げられている。フランスの作家マラルメやフロベールがキャラクターとして取り扱い、ワイルドがその独創性をもって描いたサロメは、*virgin / whore* の両方の特性をもつ女性として現れる。サロメという女性が、時代、作家によってつぎつぎと変遷していく様子は、とても興味深いものである。

ワイルドにあっては、サロメは、穢れを知らない少女のように登場するが、ヨカナンを連れ出すためには、シリアの青年を操り、自分の欲望を満たすためには、自分のセクシュアリティを利用する。『サロメ』は *heroine* サロメを中心とした人間の多様な欲望の物語であると分析する金田氏の論説は、説得的である。ただ、フランス構造主義詩学の用語やカタカナ語が随所に用いられているので、なじみのうすい読者は、すらすらと論文を読むことができないかもしれない。例えば、「簡潔であることによって、記述的な側面から離れ、言語のパフォーマティヴな側面を前景化する。」における「前景化」という用語は、*foregrounding* の和訳であるが、もとはチェコ語の *actualization* (*aktualizatsia*) 「活性化」をアメリカに亡命したチェコ学者 Garvin が考え出した用語である。また、「救世主という語がよりリテラルに捉えられる様も描かれることによって、リテラルとフィギュラティヴというボーダーは侵食される。このようなヨカナンとその予言は、自らのパフォーマティヴィティに犯されながら、

それぞれのキャラクターによって不均質に意味付けされていき、シニフィエが真偽というロゴスに属さないという事実を暴き出すのである。」などの文章は、日本語に置き換えられる場合は、もっと日本語の単語をつかって説明できるのではないだろうか。今後の金田氏の一層のご努力をお願いしたい。

第3番目の論文は、森あおい氏による「『レシタティヴ』から『パラダイス』への移行—人種は何を語るのか」である。アフリカ系アメリカ人の女性作家でノーベル賞受賞者であるトニ・モリスンの短編小説“Recitatif”を導入点にして、『パラダイス』という作品の解釈を試みるが、森氏の論説は、わかりやすくしかも納得させるものがある。モリスンは、博学な作家として自分なりのひとつのテーマをもって、精密に小説を組み立てていく。そして、いつもその基礎にあるのは、人種問題である。聖と俗、男と女、白人と黒人などというキリスト教の男性優位な価値体系を疑問視する。そうして、黒人と白人とは、それぞれの違いを認め、皮膚の色の違いを差別の材料にするのではなく、相補的な関係で相手を取り扱い認識すれば、多様な価値観を受け入れるパラダイスがこの世に誕生する可能性があることを二つの作品は主張している。モリスンの作品は、まるで中世文学の作品のように、テーマとか作者の創作意図がかなりはっきりしているような印象を受ける。その意図を文字通りにあからさまに表現するのではなく、作者は、あるときは象徴によって、あるときは寓意によって、またなぞとして提示してくる。読者の好奇心をくすぐるような、解釈が読めば読むほど深くなるようにモリスンは読者に挑戦してくるようである。

第4番目の論文は、田中秀毅氏の「部分構造と関係詞節に共通する機能について」というものである。A of B という構造が、部分を表す場合を、又、関係詞節と共起した場合をこまかく分類して考察する。先行研究にも目を通し、じっくりと自分の頭で考え、理論を構築していく田中氏の論の進め方は、手堅い。文法研究においても、形態を重んじる時代か

ら、意味も形態に劣らず重要視する時代になってきていることがわかる。

最後の論文は、外国人教師で英語教育学専攻の Stuart Ruttan 氏が提出した“Jouneys into the Ecology of World Englishes and English Language Teaching”というものである。1990年代になって、世界で唯一の超大国になったアメリカ合衆国の英語が、ますます世界に普及するとともに、英語といってもいくつかの種類が存在し、それぞれが存在を主張するから、日本における外国教育に英語を選択する場合、どの英語を目標としたらよいだろうか、という問題である。日本人にとって、1945年の太平洋戦争が終結して以来、アメリカ英語が、学校教育の目標言語となってきた。しかし、近頃は、オーストラリアやニュージーランドの英語も、日本では親しまれるようになってきた。また、日常の日本語のなかにも一割近くの英語が、つまりカタカナ語が使われていることも忘れてはならないことである。そこで、ルタン氏は、英語教育にも環境保全の理論を援用して、日本で教える外国語としての英語は、日本という環境で、母国語を大切にしながらも、日本的な英語でよいのではないかと提案している。この論旨には、私は賛成でないけれども、英語にもいろいろな変種が世界中に生まれているという事実をもって直視すべきであるというのには、賛成である。

以上簡単に「英語世界のナビゲーション」を紹介批評してきた。本学の英米言語文化学科に所属する教員のひとりひとりの研究分野についての理解を深め、お互いに切磋琢磨するきっかけをこの本は与えてくれるであろう。また、わが国の学会へ貢献することも確かである。

(須藤 淳 記)